

令和2年度第4回半田市環境基本計画策定委員会議事録（案）

開催日時	令和3年3月5日（金）	午後1時30分～午後3時
開催場所	半田市役所 庁議室	
会議次第	【議題】 1 あいさつ 2 議事 （1）パブリックコメント意見への対応について （2）第2次半田市環境基本計画案について	
出席委員	千頭聡、大場渉、森啓貴、加藤大将、野口恒雄、榊原靖、安達典孝、澤田和孝、滝本均 ※敬称略	
事務局	環境課課長 大嶽、環境政策担当副主幹 鳥居、環境政策担当 青木、環境保全担当主査 森下 (株)地域計画建築研究所(アルパック)主査 植松	
その他	欠席：藤田委員、木下委員、梶川委員、入谷委員	
次 第	議事概要	
1 あいさつ	ー委員長あいさつー 【委員の移動について】 東邦ガス(株)半田営業所前所長の田島委員が3月1日付にて異動となったため、後任の半田営業所長である入谷賢様に後任の委員を務めていただくこととなった。なお、入谷様は所用により本日欠席のご連絡をいただいている。	
===== 2 議事 (1) パブリックコメント意見への対応について (2) 第2次半田市環境基本計画案について	===== (事務局) 資料1、資料について説明。 (千頭委員長) ご意見はいかがでしょうか。 (大場委員) 2頁の原案修正について、「地域特性を活かした」の表現が地産地消と地域特性が混同されがちである。地産地消というと、電気をつくる燃料も生産するのも使うのも地元というイメージだと思われる。電力を作る立場からすると、地域特性というのはウッドチップといった輸入燃料を荷役する衣浦港という港があるということであり、そういった経済的な地域特性と混同しがちである。地域特性を活かすのであれば、バイオガスを含めて支援すると記載し、再生可能エネルギーの利用ソースとして、木質バイオマス発電を利用していくという考え方もある。「地域特性を生かした」と「木質バイオマス発電」の文言を離すなど、文章表現を工夫するとよいかもしれない。 生きている牛のげっぷも地球温暖化に悪いという考え方もあり、どこまでの視点で温暖化をみていくのか難しい面もあり、一概に判断はつきか	

ねる部分もあると思う。
本文で最大級と表現すると、市内1か所だけの木質バイオマス発電施設だと思われるが、現在稼働しているバイオマス発電所は二か所ある。これも産業面での半田市の地域特性である。

(千頭委員長)

どういった文章表現とするか、委員長にひきとらせていただいてもよろしいでしょうか。ご意見の趣旨を踏まえた上で、最終的にどのような文章にするか後程事務局と検討させていただき、みなさんにお返ししたいと思う。

(委員)

異議なし。

(千頭委員長)

20 頁一番下の事業者の役割について、「環境配慮型自動車への乗り換えを検討する」とあるが、この表現では本計画においてはPHV（プラグインハイブリッド車）も含まれてくるので、ガソリン車ゼロに向けた動きとは矛盾してくる。検討が必要ではないか。今後、市の公用車も買い替えをしていく予定なのか。

(事務局)

すぐには難しいかもしれないが、事務事業編にも位置付けており、いずれは目標を立てて導入を進めていきたい。

(千頭委員長)

58~59 頁に計画の進行管理が掲載されている。半田市では、環境基本計画の日常的な進行管理は「はんだ環境パートナーシップ会議」が担ってきた。59 頁に、本計画の推進は、毎年度点検・評価をすることと、5年後をめどに中間見直しを行うこととしており、これを踏まえて、今後のスケジュールについて、説明いただきたい。

(事務局)

68 頁に計画策定の経過を記載している。本日が第4回策定委員会である。3月29日に第2回環境審議会を開催し、環境基本計画に意見を添えて答申いただき、委員会への報告を経て、5月に計画を公表し確定する。

(千頭委員長)

本日の計画案について、先程ご指摘の2点を修正したうえで、案として了承するというところでよろしいか。

(委員)

よろしいです。

(千頭委員長)

3. その他

最終的には審議会の答申にお任せしたい。ありがとうございました。

(千頭委員長)

第2次の環境基本計画を推進していくうえで、何かご意見などをいただけますでしょうか。

(野口委員)

専門外であったが、私自身は平成2、3年から矢勝川の彼岸花の活動に関わり、平成7年に「矢勝川の環境を守る会」を発足して、今年でちょうど25年になる。私は、昨年やむを得ず会長職を受けたが、言葉として「創業と守勢はいずれがかたきか」という中国のことわざがあるが、それをずっと感じている。当初のメンバーは10人であったが、今は日々平日活動しているのは男性のみ4人、女性は壊滅状態である。昨年からは地域のみなさんにも、前会長が亡くなってからとてもやれないと言われている。彼岸花まつりが終わった後、記念館の向かいに菜の花を植えたり、案内所向かいにポピーを植えたりしていたが、それをやる体力などが無く、彼岸花以外は、やれない、やめようということになり、別の方にやっていただいている。今残っているメンバーは平均年齢79才で、本当に申し訳ないと思うが、彼岸花については小栗大造さんの考えで頑張っていきたいと考えている。定年が65才や70才になり、定年退職後にやっても良いという人も減ってきているように思う。少しでもみなさんの協力があれば、力尽きるまでやっていきたい。

水の浄化活動として、地元でEM菌に取り組んでおられる方がいる。半田市としてはEM菌を採用していないと聞いている。水が汚いと聞くことも多く、普段はそんなことはないが、経験上、大雨が降ると汚れたものが流れてくると感じる。ごんの橋のあたりまでは、水路の清掃活動を行っておられた。毎日、どうしたらよいのかというのが、私の正直な気持ちである。

(事務局)

2月上旬に矢勝川に流入する11カ所の水質について調査を行い、上流から流れてくる支流の水質が良くないことが分かった。また、阿久比からの水質が悪いことが分かっており、それをどうにかしないといけない。阿久比町にも話をしていきたいと考えている。

(野口委員)

ごんの橋から下流の水が濁っている。生活排水などが流れて来ている。

(加藤委員)

こういった会議に積極的に参加させていただいて、準備段階の会議の内容を吸収することで、好循環になると思う。今後も積極的にやっていきたい。青年会議所も積極的にSDGsに取り組んでいる。東京で開催されるセミナーなどにもリモートで参加させていただいている。

(森委員)

全体総括ということで、まさに先程、千頭先生が冒頭の挨拶でおっしゃったことが重要で、実行していくことが大事だと思う。

どういう風にしていくべきか、いかにどれだけの人意識できるか、これは個人だけでなく事業所もそうである。パブリックコメントの意見でも、「より自分事として取り組むこと」とあり、まさにこの言葉につきる。今回の計画の中で、42頁に「事業者の環境経営を推進」とある。10年ほど前に商工会議所に依頼があり、市内のエコ事業所を増やしたことがあるが、登録してどうなのか、その後が中途半端だと感じる。次の展開を見据えることも必要であると感じている。国の姿勢としては、頑張っている事業者に対して補助金を出している。他地域でも助成制度があったり、融資制度を作っている市町もある。すぐには難しいと思うが、事業者の思いとしては、経営が大事であるので「とはいってもね」と次の展開に行きにくいところもある。頑張っている事業者を応援する、そういった支援が大事だと思う。みんなで半田市全体として取り組めるよう、みなさんが環境への意識を向けていく気運を作っていくためにも、自分自身にあてはまるような施策も大事である。

当会議所会頭が常々、市にお願いしているのは、地産地消というキーワードである。いろいろなことを取り組むにあたって、地元の事業者を使ってほしい、お金が市内で回るようにしてほしいということである。よりみなさんに自分事と考えて頂くために、地域全体でみんなを巻き込んで計画を推進していくというしくみ・実行体制を敷いていただきたい。

(大場委員)

当施設では、木質バイオマス燃料を燃やして電気を作っているが、国産燃料は13%で、それ以外は木質チップ、PKS(油ヤシの種の殻)を使用している。国産材としては、間伐した時に出る未利用材をチップ化して使用するが、この未利用材は欲しくても中々回らないのが実情である。林業従事者が少なく、間伐が十分に出来ない状況にあり、木を切ってもなかなか山から未利用材までは出せない。また、林業の現場に集めるだけの人材がない、というのも現状である。

二つ目に、環境と経済の両方を回して頑張っていきたいと思いますという考えであるが、今の生活レベルを落とさずに、と書いてあることが多いが、市民のみなさんも含めて取り組もうと思うと、ある程度の不便も必要だという意見もある。半田市の特徴として、環境課が経済部の中にあるという点もある。環境と経済の両方の立場にあるので、是非頑張ってバランス取りを実行して頂きたい。

(榊原委員)

これから進行管理や見直しが重要になってくる。この会議ではみなさんで共有しているのでよいが、まだまだ環境は弱い立場であるので、地道にやっていくしかしょうがない。このコロナ禍において自然観察会もやりにくく、なにか事があると、環境は最初にはないがしろにされがちな分野である。

本計画は、ゼロカーボンをいち早く押し出せたのは大きな特徴である。しかしながら、これは大きな課題であり、国・県・世界全体で取り組ま

なければならぬ課題なので、忘れずに活動していけるとよい。

(安達委員)

ゼロカーボンについて、市民の中での理解はほぼないのではないか。そもそもどういふものか、という落とし込みをよっぽど頑張らないといけぬ。どう市民の方々に落とし込んでいくのか。学校を通じた教育資料の提供や、市主催のイベントでの広報、事業者との連携など、いろいろな情報を流して理解してもらい、何かしないといけぬという機運づくり、機会づくりができるとうい。声の大きい人が極端な意見を言ってしまうと市の方向性と違が出てしまうので、そうならないようにするためにも、ゼロカーボンの説明も含めてコンセンサスをとっていけるよう、市民の認識を少しでも広げていけたらよい。

(澤田委員)

各委員からの意見をうまくまとめていただいたと思う。計画は策定した後の推進が肝心である。市民・県民のためという共通の目的を持つ行政機関どうし、互いに協力して地域の環境を良くしていけたらと思う。また、計画の推進には市民や事業者との協働が重要になると思う。パートナーシップ会議でもしっかり議論して、市内の各主体と連携して進めていくことが重要である。

(滝本部長)

これまでのご経験やお仕事柄からの知見を踏まえてご意見をいただき、大変ありがたく思っている。私自身が初めて担当したのは公害であり、今、市民経済部の環境分野で職を終えられることは感慨深い。今回の計画策定の議論を通して、地球、日本、地域はいろいろなものに影響を受けているということを感じた。工業や農業などそれぞれの産業による力の構造の違いが地域の力の差になる。人の活動や産業の活動がどう動いているのかが大きく関わってくる。以前は環境問題とうい個別の問題が多かったが、今は地球環境問題など大きな問題となっている。今回の計画では、ゼロカーボンが一番の柱であり、令和3年にまずすることは、2050年ゼロカーボンに向けたロードマップを作ることである。その時に何をしないといけぬか、課題や解決方法を抽出して市民に提示して広げていくことが大事である。ロードマップについても、最新の情報に基づいたゼロカーボンシティの取組を掲げ、柔軟に改定していけばよいと思う。その時に、市民や事業者の方々が取り組めるかどうか問題である。

コロナ禍において、公衆衛生と経済のトレードオフの関係が明らかになり、その舵取りに苦しんでいた。これからはいろいろな技術が出てくると思うが、市民生活や事業者活動と、環境との関係をどうするか、どちらを優先するか考えないといけぬ。そういう点では、今回のコロナウイルスの経験は役に立ったと思う。カーボンニュートラルとうい同じ目的のもと、実践していかなければならぬ。

(千頭委員長)

	<p>日本全体でゼロカーボンをめざすのが大事であり、自治体だけで達成するのは難しい。ゼロカーボンはもう一度広域的に考えるべきであると思う。知多半島の自治体に対して、いろいろな機会を通して、ゼロカーボンに向けて一緒に動きませんか、とお話をしている。お互いの資源を活かしあって、ゼロカーボンの達成に向けて進んでいけるとよい。</p> <p>(事務局) 本日はありがとうございました。</p>
	(終了)